



平成

武田城下町絵図

文化庁
平成25年度 地域の特徴を活かした史跡等総合活用支援推進事業

武田の郷めぐりに
いざ出発じゃ！



イラスト：もち

作製：山梨県埋蔵文化財センター
〒400-1508 山梨県甲府市下曾根町923
TEL 055-266-3016
<http://www.pref.yamanashi.jp/maizou-bnk/>

協力：甲府市教育委員会
白根桃源美術館

禁無断複製・掲載

1 現るは側とにがた、構
2 発角田三こ統め徴月)
4 武石まか堀てと口渡もが

見どころ

□31 梅屋敷天満宮

上杉謙信の家臣だった大熊備前守が信玄に帰属し、屋敷を構えた場所で、屋敷神として祀った天神社が今に残っています。付近には梅の樹が多く、江戸時代から梅屋敷と呼ばれ親しまれていました。



□32 御崎神社

もとは石和信光の館鎮守御崎明神でしたが、信虎が甲府へ開府した際、館鎮守稲荷明神として武田館の北の稲荷曲輪に再勧請しました。後に甲府城築城の際に、甲府城の乾の鎮守として美咲の現在地に移されました。府中五社。



□33 法泉寺

武田信武が創建、後に菩提寺となります。武田氏が滅んだ際、京都に送られた勝頼の首は妙心寺に葬られ、その遺齒髪を秘かに譲り受けた快岳周悦和尚が持ち帰り、信武の墓の隣に葬りました。甲府五山



甲斐善光寺

東日本最大級の木造建築である甲斐善光寺は、武田信玄が信濃侵攻を行い上杉謙信と戦った、第3回川中島合戦の後に、長野善光寺の本尊阿弥陀如来像の他、僧侶や門前町の商人・職人に至るまでを甲斐の板垣の里に移動させ建立したお寺です。戦火から仏様を守る為に避難させたと言われますが、実は善光寺信者の心を引きつけ、人心を掌握する為だったようです。この時に、あまりの重さに引きずって持ってきたといわれる梵鐘が、本堂東の鐘楼に掛けられています。よく見ると、この時についた傷や、取れてしまった乳の跡が残っています。また境内には、豊臣秀吉の命で甲府支配の為に来甲した加藤光泰の墓や、甲府勤番士の墓などがあり見所いっぱいです。



武田神社から車で約15分

○1 聖道墓

武田竜宝の墓と言われ、呼ばれて大切にされています。屋敷がこの付近にあったといわれ、聖道小路が通っていたともいわれます。



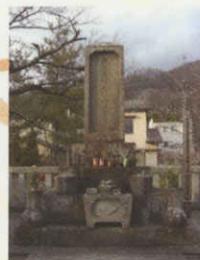
○2 躑躅ヶ崎亭跡

武田信玄が風景を楽しむ為の東屋が建てられました。現在は金比羅さんが祀られています。躑躅ヶ崎に続く竜華の峰は江戸時代に甲斐八景の一つに挙げられ、名月の観賞地として和歌にも詠まれました。



○3 武田信玄火葬塚

信州駒場で病死した信玄の遺骸を、武田二十四将の一人、土屋昌統の屋敷だったこの場所(かつては山本勘助の屋敷があったとも)に運び、秘かに火葬にしたといわれています。魔縁塚とも呼ばれていました。江戸時代にこの地を発掘した所、石棺が出てきましたがまた埋め戻し、墓石などを整備したといえます。以来円光院と地元の人々により、信玄の命日である4月12日に法要が行われています。この地には「岩窟のヤツブサウメ」と呼ばれる県文化財(天然記念物)に指定されている珍しい梅の木があります。



○4 長坂長閑齋屋敷跡

屋形の広小路公会堂の前に「長坂左衛門尉長閑齋邸跡」の碑が建てられています。長坂釣(長)閑齋は信玄・勝頼に仕えた老臣で、愛宕神社にある釣閑石は彼の塚とも言われています。



□1

武田信玄としてを受け継いだ廉筆は宗岳和信といわれます。ありまが置か

□

歴史をちき信成大夫正成この信玄使った残さ

□4

下積地地名となつ造積市文化ます。んでい周辺をました

駒井高

『高白ある勝頼に



□1 恵運院

武田信虎の父信縄の菩提寺として、武田家の厚い保護を受けたお寺です。武田信廉筆による県文化財「雪田宗岳和尚画像」を収蔵しています。信玄手植の梅と言われる梅があり、由来を書いた「梅花の碑」が境内にあります。裏山の恵運院山には、危急を知らせる警鐘が置かれました。



□2 興因寺

平安時代創建（当初は天台宗）の由緒を持つ、山梨を代表する曹洞宗の寺院。後陽成天皇の第八皇子良純親王が甲斐に配流された際に滞留した寺で、「水手の水伝説」が残ります。柳沢吉保の家老柳沢権太夫保格夫婦の墓があります。

□5 宝積寺

駒井高白斎の子、右京進昌直が開基となって永禄3年（1560）に創建されました。右京進の墓と伝わる五輪塔が残されています。



□6 愛宕社（宝蔵院）跡

古府中町日影公会堂前に秋葉社の祠2基と道祖神1基が祀られています。付近一帯が、武田氏時代の愛宕社の社地でした。



□7 禅林院

能成寺（甲府五山）の隠居寺として開創されたと伝えられます。武田館の鬼門（北東）に位置していた為、地子が免除されていました。開山の竺英和尚は武田氏の親族でした。



□3 積翠寺

歴史は古く、行基開創の縁起をもちます。石水寺とも書きました。信虎が築いた要害城の南に位置し、大永元年（1521）駿河の福島正成との戦いの時に、大井夫人はこの寺に避難して嫡子太郎（晴信・信玄）を出産しました。その時に使ったという産湯の井戸が大切に残されています。



□8 若宮八幡宮

通常八幡宮で祀られる応神天皇ではなく、その子である仁徳天皇を祀っている事から「若宮」八幡宮となりました。地元では氏神さんと呼ばれ親しまれており、かつては境内で雨乞いの祭りが行われる事もありました。



□4 長宝寺

下積翠寺町に「釈迦堂」の地名が残り、公会堂に廃寺となった長宝寺の本尊「木造釈迦如来坐像」（平安：市文化財）が安置されています。付近に武田義信が住んでいた屋敷がありましたが、婚姻を機に、屋敷地は周辺を領有していた武田家家臣駒井高白斎に与えられました。門と建物が長宝寺に移されたといえます



□9 興国寺

武田不動尊が祀られています。毎年2月に住職がご本尊の掛け軸を持って組の家々を回り、家内安全等を祈ります。

□10 武田神社

江戸時代、松や竹が生い茂り荒れてはいたものの、中曲輪には法性大明神を祀る石祠がありました。古い絵図には正方形の石積みや、丹塗りの柱を持つ二階建ての社が描かれているものもあり、信玄を祀る人々により大切にされていた事がわかります。明治になり、祠は天守台の上に移され、立派な社殿が造られました。



駒井高白斎：

『高白斎記』（『甲陽日記』）を記した。武田家の家訓である「甲州法度之次第」の奏上にも関わった、信玄・勝頼に仕えた重臣。

□11 古八幡社

信虎が甲府を開く際、石和で甲斐国総鎮守として祀られていたのを、館の西側に移し、府中八幡としました。神社統制の中心に位置づけられていて、神社各社には諸役が課せられていました。甲府城築城に際し、宮前町の現在地に遷座されましたが、多少位置はずれているものの、旧地にある峯本公会堂裏手に古八幡としてそのまま現在も残されています。



□12 祇園寺（峯本院・牛頭天王社）跡

武田館の裏鬼門（南西）鎮護の為に建てられた清光山峯本院を別当として、疫病除けの神である牛頭天王社が祀られていました。甲府城下町建設の時に祇園寺として愛宕町に移され、現在は片足を垂らした半迦像の珍しいお地蔵様と、道祖神が路傍で大切に祀られています。



□13 大神宮（伊勢の森）跡

信虎の時代、躑躅ヶ崎館鎮守の為に、伊勢から屋形二丁目のお伊勢の森へ大神宮が勧請されました。伊勢外宮の御師幸福出雲が、古府中に屋敷を与えられ、大神宮は後に横近習の現在地に移され、祀られています。残念ながら、現在この場所には往事を偲ぶものは何もありません。

□14 金山神社

鍛冶小路の北端の畑の中に、小さな祠が残されています（個人宅）。小路周辺に住んだ鍛冶職人達により祀られ、かつては毎年8月15日の府中八幡宮（古八幡）の祭礼の際に矢の根が献上されていました。



□15 永慶寺跡

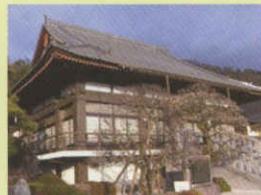
江戸時代、柳沢吉保の菩提寺である竜華山永慶寺があった場所です。子の吉里が大和郡山に転封された際、吉保夫妻の墓は恵林寺に移され、寺は破却されました。現在は護国神社となっています。この永慶寺の山門が大泉寺の総門として移築されたと伝えられています。



大泉寺の総門

□16 円光院

武田信虎が父信重の菩提寺と定めた石和の成就院を、信玄が甲府に移し三条夫人の墓所とした事から、夫人の法名に因んで改称しました。寺宝の勝軍地藏像と刀八毘沙門天像は信玄が陣中の守り本尊として崇拝していたものを遺言により納めたものと伝えられています。甲府五山。



□17 大泉寺

大永年間に、武田信虎の開基で創建されました。信虎の菩提所で信玄・勝頼の三代の廟があります。甲斐曹洞宗常法幢七カ寺の一つです。息子である武田信廉の筆による「絹本著色武田信虎像」（国文化財）を始め、数多くの文化財が残されています。



武田三代廟所

□18 甲斐惣社八幡宮

信虎が石和から甲府の館の西に移した府中八幡を、甲府城築城の際に名を改めて現在地に移しました。府中五社。



□19 華光院

県内で数少ない真言宗寺院の一つ。信虎が創建した荒神堂を天文20年（1551）に信玄が現在地に移し、別当寺として華光院良林寺としました。境内の太子堂は、柳沢吉里が転封されるとき、甲府城内から移した聖徳太子像を祀ったものとされます。毎年4月に行われる、山伏の火伏せの祭り「火渡り」でも知られています。



太子堂

□20 八雲神社

武田館の裏鬼門の地にあった峯本院と牛頭天王が、甲府城築城に伴って祇園寺として愛宕の地に移されました。明治の神仏分離によって八雲神社となり、現在に続いています。



□21 愛宕神社

信玄が相模国愛宕山から持ち帰った勝軍地藏（愛宕権現）を、鬼門守護のために聖道小路に勧請し、愛宕山宝蔵院が別当を務めました。天正12年（1584）、甲府城の鬼門除けとして現在地に再勧請され、それにより、それまで甲斐奈山と呼ばれていた背後の山が愛宕山と呼ばれるようになりました。



□22 妙遠寺

飯富源四郎（山県昌景）が開き、信玄の局で小幡山城守の妹である小宰相が再興したと伝わります。戦国時代には穴山小路にあったとされ、寺宝として、武田陣中守護の毘沙門天や、加藤清正が朝鮮出兵の際に持ち帰ったとされる玉簾などがあります。



□23 行蔵院

本尊の武田不動尊と、山本勘助の念持仏と伝わる不動明王像が安置されています。

□24 満蔵院

大永2年（1522）に武田信虎が霊夢を感じ、像を造って祀った清水寺と、信玄が後に建てた毘沙門堂（正覚寺）の二寺を合わせて万蔵院と改称しました。近世になって現在地に移り、寺院名も満蔵院となりました。



□25 法華寺

天平13年（741）に全国に造られた国分尼寺の1つで、甲府城築城に伴い現在地に移されました。徳川将軍家の祈願所でもあり、「三葉葵」の紋の使用を許されました。寺の裏に、甲府城三の堀に伴う土塁跡と見られる盛り土が現在も確認できます。



□26 清運寺

武田二十四将の一人横田備中守高松が葬られたお寺です。加藤清正を所願成就の神「せいしょこさん」として祀っています。



□27 六角堂（西昌院跡）

信玄の姉（信虎の側室とも）の御西の菩提所として、勝頼が天正3年（1575）に創建し、近世になって現在地に移りま



した。京都山科の六地藏寺から六体の地藏を迎え、六角地藏堂に安置していましたが、大正5年の地藏祭りの時に三体と建物（現在のものは再建）を焼失してしまいました。



□28 旧柳町大神宮跡

伊勢から穴山小路のお伊勢の森に大神宮が勧請されました（個人宅）。現在は柳町に移され、祀られています。



□29 金幣稲荷

尊躰寺の旧地で、徳川家康が天正10・11年に来甲した時に在陣した事を記した碑が残っています。寺は甲府城築城に伴って城東の現在地に移され、明治になって付近に遊郭が作られた時に、遊女の守り神として稲荷が祀られました。



□30 要法寺

武田信玄を開基、次男竜宝を開山として永禄11年（1568）、盲目だった竜宝の病氣平癒を祈願して創建されました。明治の火災により多くの史料を消失しましたが、残された梵鐘の銘から由緒を辿る事ができます。

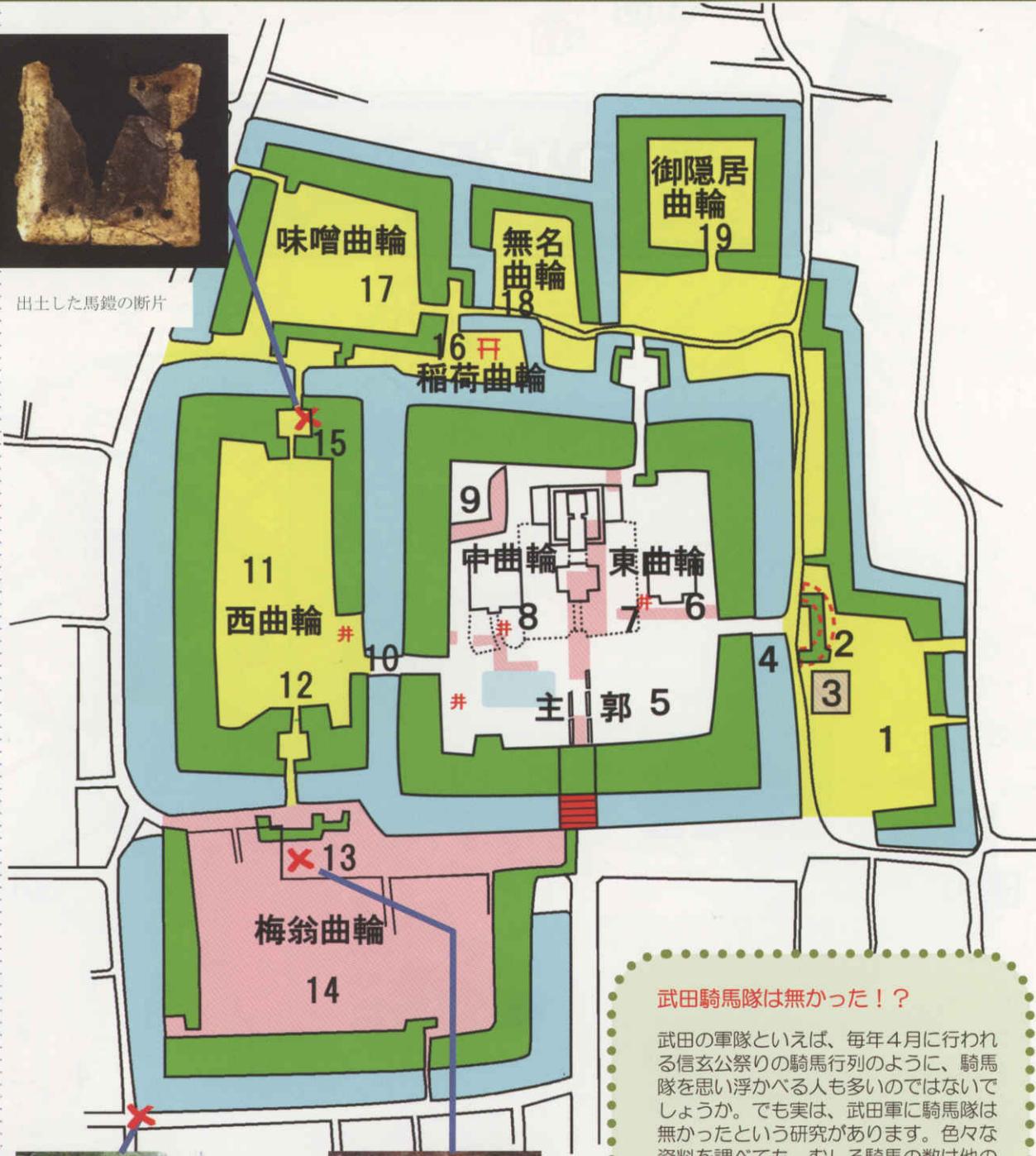




武田氏館(躑躅ヶ崎館)見所MAP



出土した馬鎧の断片



梅木堀栓元に祀られる文化元年(1804)銘のある馬頭観音



西曲輪南虎口から発見された馬骨

武田騎馬隊は無かった!?

武田の軍隊といえば、毎年4月に行われる信玄公祭りの騎馬行列のように、騎馬隊を思い浮かべる人も多いのではないでしょうか。でも実は、武田軍に騎馬隊は無かったという研究があります。色々な資料を調べても、むしろ騎馬の数は他の戦国大名家より少なかったそうです。ではどうしてそんなイメージが?それは長篠の合戦に触れた織田方の文献に多く登場したからだと思います。信長の武功を強調する為とも言われますが、死を覚悟して騎馬で敵陣に向かっていった武田軍の勇猛さが、強烈に印象づけられた所為かもしれません。

10
主郭と深い堀を
ていま

11
信玄の
して、
曲輪と
はつき
せん。
近に、
が残っ
に向か
輪の南

12
後世の
子はは
豊臣時
下部は
石を礎
その様
虎口と

13
平成元
体分発
す。頭
した。
れ、大
ら、曲
ません

14
武田氏
が甲斐
ってか
親吉は
れた由
なり、
た頃、
た。現
西側の

1 大手

現在神社の入口となっている武田館の南側は、かつては土塁が繋がっていて、東側にある大手口が館の正門となっていました。門の前にはいくつもの石塁や土塁が設置され、敵は真っ直ぐに入る事が出来ませんでした。武田時代には曲がる回数が5回程度だったものが、後には20回ほど曲がらなければ主郭に入れない構造になっていました。



2 三日月堀と角馬出

発掘調査により、現在残る角馬出の石塁の下から、武田氏の城の特徴と言われる三日月堀が確認されました。これは武田氏滅亡の後、新統治者の権力を誇示するために、かつての統治者の象徴でもあった丸馬出と三日月堀を破却し、その上に新たな石塁（豊臣：加藤時代）を築いたためと考えられます。



3 厩跡

発掘調査の中で発見された柱穴は、特殊な配列と古い絵図から厩跡だった事がわかりました。石塁との関連性を感じる配置から、武田家滅亡後の勢力が作ったものと考えられます。



4 堀と石垣

武田館の周囲は、深い堀と石垣を配した高い土塁に囲まれていました。山裾に築かれている地理的環境から、堀の南半分には水が張られていましたが、北側は空堀となっていました。大手入口や、主郭から西曲輪へ渡る土橋の両側などに現在も当時の石垣を確認する事ができます。



5 主郭・6 宝物殿

政務が行われた東曲輪と、当主の日常の居住空間があった中曲輪とに分かれていて、中曲輪には居館と庭園があった事が絵図にも描かれています。かつては中央に加藤光泰が築いたとされる石塁があり、発掘調査の結果、それらを裏付ける痕跡（池跡や石列など）が確認されています。当初の居館は將軍邸である花の御所（室町第）と同様の方形居館であり、建物配置や名称にも將軍邸の影響が見られます。宝物殿には、神社に伝わる武具や絵図・古文書など、武田家にまつわる貴重な資料が多数展示されています。裏手にあたる場所には毘沙門堂や不動堂がありました（非公開）。



庭園跡付近に祀られている榎天神

7 井戸

館のほぼ中央に位置する井戸で、古図にも記されています。信玄公使用の井戸とされ、今でも水が湧いています。



8 姫の井戸

信玄の姫が誕生の折りに産湯に使用したことにより、この名がつけられたといわれています。また、「茶の湯の井戸」とも言われており、館内で茶を点てるときにこの井戸水を使用したと伝えられています。井戸からは茶釜などの品々が発見されていて、これは勝頼が京よりの客をもてなす茶会の際に使ったものといわれています。現在は宝物殿に展示されています。



心地良い音色の水琴窟

9 天守台（非公開）

通常は立ち入り禁止で見学はできません。武田家滅亡後に入甲した織豊系領主によって築かれた野面積みの石垣が残されていて、調査の結果、御殿跡の礎石が確認されました。甲府城完成後に破城され、石垣の南東部コーナーの石垣が人為的に破壊されています。台上に残る、「武田法性院」と呼ばれる信玄を祀った祠は、天明元年に神社北側の日影村民の手により再建されたもので、江戸時代には現在の菱和殿付近にありました。

10 堀・石垣・土橋

主郭と西曲輪を結ぶ土橋や深い堀が、旧景をよく残しています。



11 西曲輪

信玄の長男義信の婚姻に際して、新居として造られた曲輪といわれていますが、はっきりとは分かっていません。主郭とつなぐ土橋付近に、絵図にも見える井戸が残っていますが、現在は水はありません。曲輪は北に向かって序々に高く3段のテラスとなっていて、曲輪の南北出入口に柵形の虎口が設けられました。



12 柵形虎口と礎石

後世の攪乱により当時の様子はほぼ残っていませんが、豊臣時代に改修された石垣下部に、武田時代の門の礎石を確認する事ができます。その様子から、北側の柵形虎口と大体同じ形態であったと考えられます。



13 角馬出

平成元年の発掘調査で、馬出土塁の下から馬の骨が1体分発見されました。これは全国的にも珍しい事例です。頭を北側に、顔を西方に向けて筵に覆われていました。また詳細に骨を調べた結果、良質な餌を与えられ、大事にされていた事が分かりました。もしかしたら、曲輪を作る際の生贄として埋められたのかもしれませんが。

梅翁曲輪の水神様



14 梅翁曲輪

武田氏が滅亡し、徳川家康が甲斐国を治めるようになってから、重臣である平岩親吉によって新たに造成された曲輪です。江戸時代になり、柳沢氏が甲府に入った頃、下級家臣の組屋敷が建てられるようになりました。現在は公園・宅地化していますが、南の一部と西側の堀(松木堀)は良く残っています。



15 柵形虎口

発掘調査で馬鎧の一部が発見されています。漆塗の皮製品で、金箔が施されました。また、曲輪が作られた当初は土橋から真っ直ぐ2つあった門に入るようになっていましたが、後に一度曲がらないと入れない構造に造り替えられました。門の規模を調査したところ、新府城の乾門と類似していることから、ここから移築した可能性も考えられます。整備が進められており、土塁石垣や石階段が見所となっています。



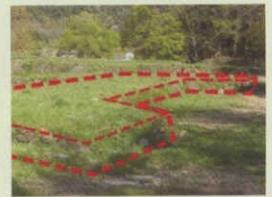
16 稻荷曲輪

屋敷神として祀っていた石和の御崎明神を、信虎が稲荷社としてこの場所に勧請したことから、稲荷曲輪と呼ばれています。武田氏滅亡後に御崎神社として美咲二丁目の現在地に再勧請されました。現在は3基の祠が残り、往時をしのばせています。



17 味噌曲輪・18 無名曲輪・19 御隠居曲輪

最初主郭のみの単郭でしたが、信玄時代以降に序々に整備・拡張されていきました。御隠居曲輪は大井夫人の隠居所だったと言われています。現在遊歩道が整備され、今も残る土塁の様子を見る事ができます。



味噌曲輪に残る角馬出の石積み土塁

境内は、葉が3本ある「三葉の松」が見られることでも知られています。昔から日本では、豊饒と平安をもたらす神霊が、松を伝って地上に降臨すると信じられていて、昔物語や伝説にも登場し、神聖な木として崇めていました。新年の家門に飾る角松は同じ意味で神の降臨を願ってのことです。「三葉の松」は全国でも珍しく、その姿から「夫婦和楽・家内安全」を象徴して、その松葉は黄金色になって落葉し、身につけると「金運」に御利益があるとされ、別名「金銭松」ともいわれています。



行われ
騎馬
隊は
色々
は他
の
す。で
は長
多く
登
力を
強
覚悟
し
日軍
の
所為か

武田城下町関連年表

元号	年	西暦			事柄	
天承	1	1131			甲斐源氏の祖源義清が常陸国から甲斐に入国、市川三郷町平塩による鎌倉時代初期、武田信光が石和に居館を構える	
永正	16	1519	8	15	躑躅ヶ崎館建設開始	
			12	20	武田信虎躑躅ヶ崎館に入館（主郭のみ、晴信期以降拡張）	
大永	1	1521	11	3	丸山城（積翠寺）内にて武田太郎（晴信：信玄）誕生	
天文	2	1533			失火により躑躅ヶ崎館焼失	
		12	1543	1	3	甲府に大風、武田道鑑宅から出火、再び晴信館類焼、駒井政武（高白斎）屋敷に移る
				2	24	萩原彦次郎宿から出火、駒井屋敷類焼、晴信、建設途中の武田館に戻る
				12	22	新館の全ての施設が竣工、晴信入居
					北郭（味噌曲輪・御隠居曲輪）建設	
		20	1551		義信と今川氏娘との婚姻に際し、西曲輪を建設	
元亀	4	1573	4	12	信玄、信州駒場にて病死	
天正	2	1574	8	2	勝頼、府中柳町宿を整備する	
		3	1575	5	21	勝頼、三河設楽原にて織田・徳川軍に敗れる（長篠の戦い）
			9	1581	1	勝頼、新府城築城着手
				12	24	新府城に移居、その際旧館は庭の松に至るまで全て破却
		10	1582	3	2	高遠城落城、新府を捨て、大月の岩殿城を目指す
				3	11	勝頼、田野の地にて自害
				3	7	織田信忠、一条館に入る
				3		織田信忠により、信長の為の仮御殿が躑躅ヶ崎館地に建設される
					織豊期、大手前に石塁及び梅翁曲輪が建設される	
					徳川家康、旧尊躰寺に本陣を置く	
			10	29	家康、甲斐国を統治	
		11	1583		家康、北条氏との戦いの際、旧尊躰寺に再び本陣を置く	
		18	1590	7	13	羽柴秀勝、甲斐国を領有する
		19	1591	3		加藤光泰、甲斐国に封じられる
					光泰、躑躅ヶ崎館主郭内に石塁を築く、文禄元年完成	
					江戸時代、無人のまま放置、古城・旧府城などと呼ばれる	
宝永	3	1706			荻生徂徠来甲、躑躅ヶ崎館跡を訪れる	
安永	8	1779			岩窪の火葬塚を発掘、石棺を発見、信玄顕彰の契機となる。山梨で初めての目的を持った発掘調査	
文化	6	1809			幕府の侍医渋江長伯が来甲、躑躅ヶ崎館跡を訪れる。石垣の崩落、櫓や天守台跡、外郭や信玄を祀る祠について記録	
明治	6	1873	4	3	機山公社殿建設規則決定（社名「武田神社」）	
		13	1880		明治天皇巡幸に伴い、信玄ゆかりの社寺調査・報告	
				12	17	武田館跡を公園として保存の計画（国事業）
				15	1882	武田神社社殿建設事務所建設、整地開始（19年以降頓挫）
		32	1899	6	20	望仙閣において、武田神社建設協議会開催、「武田会」設立
大正	4	1915	11	10	大正天皇即位を記念し、武田信玄に従三位が追贈される	
		5	1916	10	19	武田神社奉建会の始動
		6	1917	11	25	武田神社本殿建設着手
		8	1919	4	11	本殿落成、県社に列せられる
		10	1920	9		武田神社創建（建設工事完了、奉建会の解散）

高坂昌信

石和の大名。その後坂弾正忠入の指揮敗退しての連携に

真田信綱

真田幸綱多くの戦い騎という最下に備えなつた。長た。その首り埋葬され

真田幸綱

信州滋野らと上野国略に優れた。東信濃本領地回斎と名乗

多田満頼

美濃国の軽大将にの数々かにも及んだ火車鬼をつわる「鬼

内藤昌秀

武田家のした。一時の名跡を(1570)頃は全軍の中央攻撃

原虎胤(美)

下総国の甲陽の五つていたといれ、北条家城主を務を負い、こ

武藤喜兵衛

真田幸綱習として仕初陣は第1大将となる智謀で勝利躍した。一

山本勘助

三河国出られ、足軽得た豊富な手で、馬出ど、武田家中島合戦

武田二十四将

並びは兄弟・親族衆・家臣団(五十音)の順、青字は甲府市設置の屋敷跡案内板のある家臣、赤下線は白根根源美術館所蔵二十四将図中の人物
凡例…姓名〈官途・主な別称・号等〉[誤名] 生没年月日

武田晴信<大膳大夫・機山・信玄・法性院> 1521. 11. 3—1573. 4. 12

信虎の嫡男。母は大井夫人。幼名は太郎とするのが一般的だが、大永元年(1521)、信虎と福島正成との飯田河原合戦の最中に生まれた為に勝千代と名付けられたともいう。長じて、父子関係の悪化や父の暴虐の行いを憂い、駿河への信虎追放を決意する。生涯において領国拡大に意を尽くし、積極的に信州の攻略を行った。後年には天下を見据えて西上を目論み、足掛かりとして駿河今川への侵攻を企てた。これにより嫡子義信との不和が生まれ、永禄10年(1567)、義信は東光寺に幽閉されたまま没した。その後本格的に上洛へと進撃を開始、三方ヶ原で徳川家康を撃退するなどその路程は順調に見えたが、病を得、元亀4年(1573)信州駒場で世を去った。その死にあたり、後継者である勝頼に、生涯のライバルであった上杉謙信を頼る様に遺言している。

武田勝頼 〈四郎〉1546—1582. 3. 11

信玄の四男。諏訪氏の後継者として育てられた。17歳の初手柄により伊那郡代、高遠城主となったことから、伊那四郎とも呼ばれる。兄義信が謀叛の罪により没した為、信玄の後継者となる。長篠の合戦では大敗を喫したが、武将としては優れた能力を有していて、その前年には父信玄をして為し得なかった高天神城の攻略にも成功している。『甲陽軍鑑』中で「強すぎる大将」と評された。思慮深く、物静かな人物だったという。

武田信廉<刑部少輔・逍遙軒信綱> 1532—1582. 3. 24

信虎の五男。母は大井夫人。武人画家として有名で、父信虎画像・母大井夫人画像(共に重要文化財)、兄信玄を不動明王に見立てて作ったとされる彫刻鑑不動尊(甲州市指定文化財)などを残す。容姿が兄信玄にそっくりで、川中島の合戦時や信玄の死後に、敵を欺く為に兄の影武者になったという伝説もある。兄の死後は勝頼に仕えたが、武田家滅亡後、織田信長の武田残党狩りに際して捕らえられ、処刑された。

穴山信君<玄蕃頭・梅雪斎不白> 1541—1582. 6. 2

信玄の姉南松院殿を母に、娘の見松院殿を正室にもつ。穴山氏自体も武田の支流という名門である。甲斐南部の穴山領を治める。文武に秀で、和紙で小袖を作る風流人でもあったという。武田家滅亡直前の2月、徳川家康に降った。武田家名存続・再興を願っていたともいう。訪京中に起きた本能寺の変の難から避れる途中、土民に襲われ没した。

甘利虎泰<備前守> ?—1548. 2. 14

甘利氏は、甲斐源氏の支流にあたり、武田氏の譜代家老の家格をもつ家柄である。板垣信方と共に最高職である両職に就任していたとされる重臣。信虎追放・信玄の当主擁立の際にも活躍した。天文17年(1548)の村上義清との上田原の合戦に於いて、奮闘の末戦死した。

板垣信方<駿河守> ?—1548. 2. 14

板垣氏は、甲斐源氏の支流にあたり、武田氏の譜代家老の家柄である。甘利虎泰とともに最高職である両職を務めた重臣。天文10年(1541)の信虎追放の際には甘利・飯富などの宿老を説得、信玄の擁立を成功させた。翌年諏訪頼重が自刃すると、諏訪守護代に任じられた。天文17年(1548)、信玄初の敗戦とされる上田原の合戦に於いて激闘の末戦死した。

小幡昌盛<豊後守・上総守> 1534—1582. 3. 6

小幡昌盛の二男。『甲陽軍鑑』の編著者である小幡景憲は昌盛の三男。初陣で敵将の首を落とし、感状と薙刀一振を受けた。以後華々しい武功を重ね、恩賞として与えられた知行地は計七百貫に及ぶという。馬の名手であった。晩年難病に冒され、勝頼の新府城落ちの際には従う事が叶わず、善光寺門前で暇乞いをした3日後、主家の滅亡の前に死去した。

武田信繁<左馬助・(古)典厩> 1525—1561. 9. 10

信虎の三男。母は大井夫人。官途の唐名から典厩と呼ばれた。文武に優れた人物で、息子信豊に与えた99ヶ条の家訓には、全文にわたり中国の古典が引用されている。兄信玄をよく支え、父の駿河追放の際も従った。多くの信濃攻略戦に参加したが、永禄4年(1561)の第四次川中島合戦の際、敵刃に倒れた。片腕とも頼む弟の死に、信玄は深く嘆き悲しんだという。

一条信龍<右衛門大夫・信竜> 1538?—1582. 3

信虎の八男(信実を兄とした九男説も有)。信玄の異母弟。武田の支流名門一条氏の名跡を継ぐ。武名高く兄信玄をよく助けた。長篠の合戦では右翼を担い、退却の際には勝頼の姿が見えなくなってから陣を引いた。伊達で華麗を好む人物で、府中から新府へ移る時、府内家臣の家屋敷は全て破却されたが、信龍だけは綺麗に整えたまま残っていたので、織田信忠が入甲した際には一条邸に停泊したという。

小山田信茂<左兵衛尉> 1540—1582. 3. 14

平氏に繋がる名門。郡内地方を領する。武田信虎の妹を祖父小山田越中守信有の妻に、信有の姉を信虎の妻にもつなど、武田家とは親族衆として深い関係にある。父や兄の代から外交交渉に尽力し、信茂も勝頼の時には上杉氏との交渉役の中心となった。三方ヶ原の合戦では先鋒隊として活躍、大勝する。武田家滅亡後織田軍に出頭したが捕えられ、処刑された。

秋山虎繁<伯耆守>[信友] 1527—1575. 10. 21

秋山氏は甲斐源氏の支流で、武田家譜代の家柄。19歳で侍大将となり、諸城の城代を務めた。信玄の五女松姫と織田信長の嫡男信忠の結納の時、答礼名代として信長の元に赴いた。元亀3年(1572)の西上作戦の際に攻略した岩村城主となるが、3年後の長篠大敗後、信長軍に攻め寄せられ落城。妻の遠山夫人(信長の叔母)と共に磔刑となった。

小島虎盛<山城守・日意> 1491?—1561. 6. 2

遠江国の出身。父日浄の時に来甲し信虎に仕えた。虎盛が14歳の時に父が没し、翌年に家督を相続し、足軽大将に抜擢された。大永元年(1521)、上条河原の合戦で敵将の伯父の首を捕り初陣を飾り、その後も戦歴を重ね多くの武勇で名を馳せた。永禄4年(1561)6月に病没する際、子らに「よくみのほどをしれ」と遺言したという。甲陽の五名臣の一人。

飯富虎昌<兵部少輔> 1514—1565. 10. 15

甲斐源氏の流れをくむ譜代家老の家柄で、信虎に反旗を翻した事もある気骨の武人だったという。信虎追放の際は、信玄擁立派の中心の一人であった。板垣信方とともに「甲山の猛虎」と呼ばれ、自隊兵卒の武具全てを赤く染めあげ「飯富の赤備え」としても知られた。信玄の嫡子義信謀叛事件に連座し、その責を一身に負って自刃した。山県昌景の実兄。

高坂昌信〔彈正忠・春日虎綱〕 1527-1578. 6. 14

石和の大百姓春日大隅の子で、信玄に見いだされ近習となる。その後侍大将に抜擢、更には津城の城代となり、翌年高坂彈正忠昌信と改名する。第四次川中島合戦では、妻女山突入の指揮官として活躍した。長篠の合戦には参戦しておらず、敗退してくる勝頼を出迎え、身形を整えさせたという。上杉氏との連携に尽力の最中に病没。『甲陽軍鑑』の作者といわれる。

真田信綱〔源太左衛門尉〕 1537-1575. 5. 21

真田幸綱の嫡男。信玄の奥近習六人中の一人。武勇に優れ、多くの戦いに参加し、その功績から信濃武士としては唯一 200 騎という最大兵力を与えられた。岩櫃城代として、上杉謙信南下に備え、父亡き後は遺領を受け継ぎ真田郷松尾城の城主となった。長篠の合戦では、弟昌輝と参戦。奮戦したが討死した。その首は家臣により、着ていた陣羽織に包まれ、真田に還り埋葬された。墓所の信綱寺に血染めの陣羽織が残されている。

真田幸綱〔彈正忠・一徳斎〕〔幸隆〕 1513-1574. 5. 19

信州滋野氏の出身とされる。武田信虎に攻められ、海野棟綱らと上野国に亡命するが、信玄の代に武田家に臣従する。智略に優れ、難攻不落といわれた戸石城を一日にして攻略した。東信濃、佐久地方の攻略戦で活躍し、恩賞として念願の本領地回復を果たす。晴信の剃髪に順じて鬚を落とし、一徳斎と名乗った。信綱に家督を譲り、信玄の死の翌年に没した。

多田満頼〔淡路守・三八(郎)〕 1497-1563. 12

美濃国の出身。信虎・晴信に仕えた甲陽の五名臣の一人。足軽大将に任じられた。あらゆる戦いに参加し、目覚ましい戦功の数々から29度も感状を得、その度受けた傷は全身27箇所にも及んだという。満頼が信濃虚空蔵岩を警固していた時に、火車鬼を退治したという伝説の他にも、甲府市湯村温泉にまつわる「鬼の湯」伝説などを持つ。弓矢巧者であった。

内藤昌秀〔修理亮〕〔昌豊〕 ?-1575. 5. 21

武田家の譜代家老工藤氏の出身。元は工藤源左衛門尉と称した。一時甲斐を離れていたが信玄の代に呼び戻され、内藤の名跡を継いだ。侍大将に抜擢され、戦功を重ねて元亀元年(1570)頃には箕輪城代となる。元亀3年の高天神城攻略戦では全軍の指揮を任せられ、大勝に導いた。長篠の合戦に於いて中央攻撃隊として奮戦したが銃火を浴びて討死した。

原虎胤〔美濃守・清岸〕 1497-1564. 1. 28

下総国の出身。足軽大将となり、信虎・信玄の二代に仕えた。甲陽の五名臣の一人。38通もの感状と、53箇所の疵痕を得ていたといい、「鬼美濃」の異名で知られた。一時武田家を離れ、北条家に身を置いた。天文20年(1551)には信濃国平瀬城主を務めた。永禄4年(1561)の割ヶ岳城攻めの際に重傷を負い、この年の川中島の戦いには参加できなかった。

武藤喜兵衛〔真田昌幸〕 1549-1611. 6. 4

真田幸綱の三男。有名な真田信繁(〔幸村])の父。晴信の奥近習として仕え、才能を認められて名族武藤氏の名跡を継いだ。初陣は第四次川中島合戦で、本陣の守りを固めた。後に足軽大将となるが、兄信綱の死により、真田の名跡をつぐ。父譲りの智謀で勝頼を支え、上野国の平定に尽力して沼田城攻略に活躍した。一方築城術にも優れ、新府城の縄張りも行っている。

山本勘助晴幸 1493-1561. 9. 10

三河国出身。片目片足が不自由だったという。信玄に召し抱えられ、足軽大将となった。甲陽の五名臣の一人。諸国放浪して得た豊富な知識をもって、信玄から重用されたという。築城の名手で、馬出しに対する重要性を説き、丸馬出しと三日月堀など、武田家独自の築城技術にそれが生かされている。第四次川中島合戦で進言した作戦が失敗、敵陣に突撃し討死した。

三枝昌貞〔勘解由左衛門尉〕〔守友〕 1537-1575. 5. 21

武田氏以前からの、甲斐土着の名族三枝氏の流れをくむ。信玄の奥近習六人中の一人。数々の功名をあげ、27歳で足軽大将として抜擢される。山県昌景は昌貞の武勇を讃え、山県姓と腰刀の吉光を与えたという。一番槍の手柄も多く、三方ヶ原の戦いでも勇戦した。長篠の合戦の折には武田信実と共に鶯ヶ巣山の砦を守ったが、勇戦及ばず討死した。

真田昌輝〔兵部丞〕 1543-1575. 5. 21

真田幸綱次男。信玄の小姓として仕えたが、才能を認められ有力武将の師弟からなる「百足衆」に抜擢された。兄をよく助け、信濃先方衆の副将格として活躍をした。永禄12年(1569)の三増峠の戦いでは、兄や内藤昌秀とともに殿軍を努めている。長篠の合戦では兄と共に右翼を担い、敵の首を捕るなど奮戦をしたが、空しく討死をした。

曾根昌世〔内匠助・下野守〕 ?-?

曾根氏は武田氏と同族で、甲斐源氏の流れをくむ。晴信の奥近習の一人で、真田昌幸と並ぶ秀才であった。足軽大将に抜擢されたが、合戦時には様々な状況を分析する軍目付を務めた為、めぼしい軍功はほとんど伝わらない。だが、長篠の合戦の際に、戦死した浅野信種に代わって殿軍を務め、無事引き揚げを成功させたという。武田家滅亡後は徳川家康に従った。

土屋昌統〔右衛門尉〕〔昌次〕 1545-1575. 5. 21

西郡の豪族金丸虎義の次男。信玄の奥近習六人の一人。第四次川中島合戦で初陣、この時の武功から名族土屋氏の名跡を継いだ。武勇に優れ、21歳で侍大将に抜擢された。信玄の死に際し殉死を願ったが高坂弾正に止められた。長篠の合戦では右翼を担い、単騎敵陣に乗り込んだが敵の砲火に倒れた。片手千人斬りで有名な惣造昌恒は実弟。

馬場信春〔美濃守〕〔信房〕 1514?-1575. 5. 21

教来石氏(武川衆)の出身。知勇に優れ、武田譜代の板垣・内藤・高坂と共に「武田の四臣」と呼ばれた。「一国の太守になってもよい」器量を持ち、思慮深く人間味に溢れていたという。天文15年(1546)に侍大将となり、馬場の名跡を継いだ。築城技術や軍略を山本勘助から学んだ。長篠の合戦では殿軍を担い、奮戦の末討ち死にした。生涯身に傷一つ無かったという。

原昌胤〔隼人佑〕 ?-1575. 5. 21

譜代の家老原加賀守昌俊の子。自らも信玄の側近・奉行として活躍し、山県昌景とともに両職となる。戦の勝敗を左右するともいわれる陣立ての名手で、陣場奉行として信玄の絶対的信頼を得ていた。水利にも長け、「信玄堤」工事の奉行として力を尽くし、18年かけて完成させた。長篠の合戦では、陣場奉行でありながら自ら敵陣に突撃し、戦死した。

山県昌景〔三郎右兵衛尉・飯富源四郎〕 ?-1575. 5. 21

譜代の家老飯富氏の出身。飯富虎昌の弟。侍大将に抜擢され、板垣・甘利の両職亡き後の「職」に任ぜられた。信玄の嫡子義信の謀叛計画を知った昌景は「兄一人の科」として密告、その功により武田氏所縁の山県の姓を与えられた。同時に兄の部隊も引き受け、「山県の赤備え」として部隊の装備を赤く統一した。長篠開戦の折、昌景ら老臣の開戦反対の進言を勝頼らに冷笑されると「今日こそ討死」と言い捨てたという。

横田高松〔備中守〕 1487-1550. 9.

伊勢国の出身。信虎・晴信の二代に仕え、足軽大将となる。甲陽の五名臣の一人。智略に長け、34度もの出陣を重ねた。身には31を数える傷があったという。天文19年(1550)の戸石城攻めの際、難攻不落といわれた戸石城の攻略に失敗し、その後8日間に及ぶ激戦になったという。(戸石崩れ)

平成

武田城下町絵図

甲府五山

長禅寺・円光院・法泉寺・能成寺・東光寺
臨済宗に深く帰依していた信玄が、京都五山になぞらえて制定したものです。

長禅寺

第一座。南アルプス市から愛宕町に移し、生母大井夫人の菩提寺としました。夫人の墓があります。



東光寺

鎌倉時代には五山十刹に次ぐ由緒を持つ古刹。室町建築の仏殿は国の重要文化財、庭園は鎌倉中期の特徴を有する県名勝。嫡男義信や、妹婿諏訪頼重の墓があります。



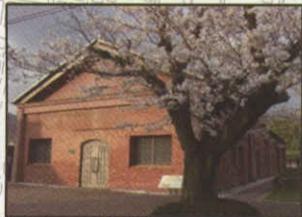
能成寺

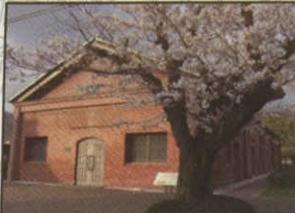
武田信守が菩提寺として八代郷に建立した寺院で、信玄の時に甲府へ移し（場所は諸説あり）、後現在地（東光寺町）に移りました。

円光院…No16 法泉寺…No33

山梨大学赤レンガ館

歩兵第四十九連隊（甲府連隊）が食料庫として使っていた建物を補修し、教育資料の展示を行っています。建物は明治期洋風建物として、県内現存最大規模の煉瓦建造物です。





山梨大学赤レンガ館

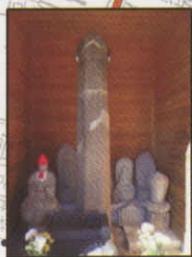
歩兵第四十九連隊（甲府連隊）が食料庫として使っていた建物を補修し、教育資料の展示を行っています。建物は明治期洋風建物として、県内現存最大規模の煉瓦建造物です。



玄法院の時の鐘の礎石

第二次大戦の時に金属供出されるまで境内にあった鐘楼は「玄法院の鐘」と呼ばれ、時の鐘として親しまれていました。

「甲府城下町遺跡」の範囲



浄興寺にある県内最大の六角石幢。



天明7年銘の満蔵院の狛犬。市内で確認されている中では最も古い石製狛犬の一つ。

甲府城二の堀・三の堀範囲

『甲府略志』の「古府之図」を基に作成した、武田二十四将の屋敷配置図。現在、比定地には案内看板が設置されています。なお、この屋敷絵図はいくつかありますが、それらは全て後世に作られたもので、比較的武田時代に近い「貞享三年絵図を複写した安政四図」（個人蔵）には、二十四将以外の重臣・家臣の屋敷が細かく書かれています。

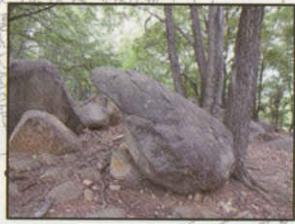
まっぷ凡例

- 二十四将屋敷地跡
- 姿を消した史跡
- 河川・堀（ 今も残る水路）
- 武田関連寺社
- その他寺社
- 古い道路
- 見所

1. 恵運院 2. 興因寺 3. 積翠寺 4. 長宝寺 5. 宝積寺 6. 愛宕社跡 7. 禅林院 8. 若宮八幡神社 9. 興国寺 10. 武田神社 11. 古八幡社
12. 祇園社跡 13. 大神宮跡 14. 金山神社 15. 永慶寺跡 16. 円光院 17. 大泉寺 18. 甲斐惣社八幡宮 19. 華光院 20. 八雲神社 21. 愛
22. 妙遠寺 23. 行蔵院 24. 満蔵院 25. 法華寺 26. 清運寺 27. 六角堂 28. 伊勢の森跡 29. 金幣神社 30. 要法寺 31. 梅屋敷天満宮
32. 玄法院 33. 御崎神社 34. 法泉寺
- 1. 聖道墓 ○2. 躑躅ヶ崎亭跡 ○3. 武田信玄火葬塚 ○4. 長坂長閑斎邸跡



河尻塚
織田信長の家臣河尻秀隆の塚です。本能寺の変で信長が討たれてすぐに民衆の襲撃にあいました。逆さに埋められたといわれ、別名「逆さ塚」とも呼ばれています。

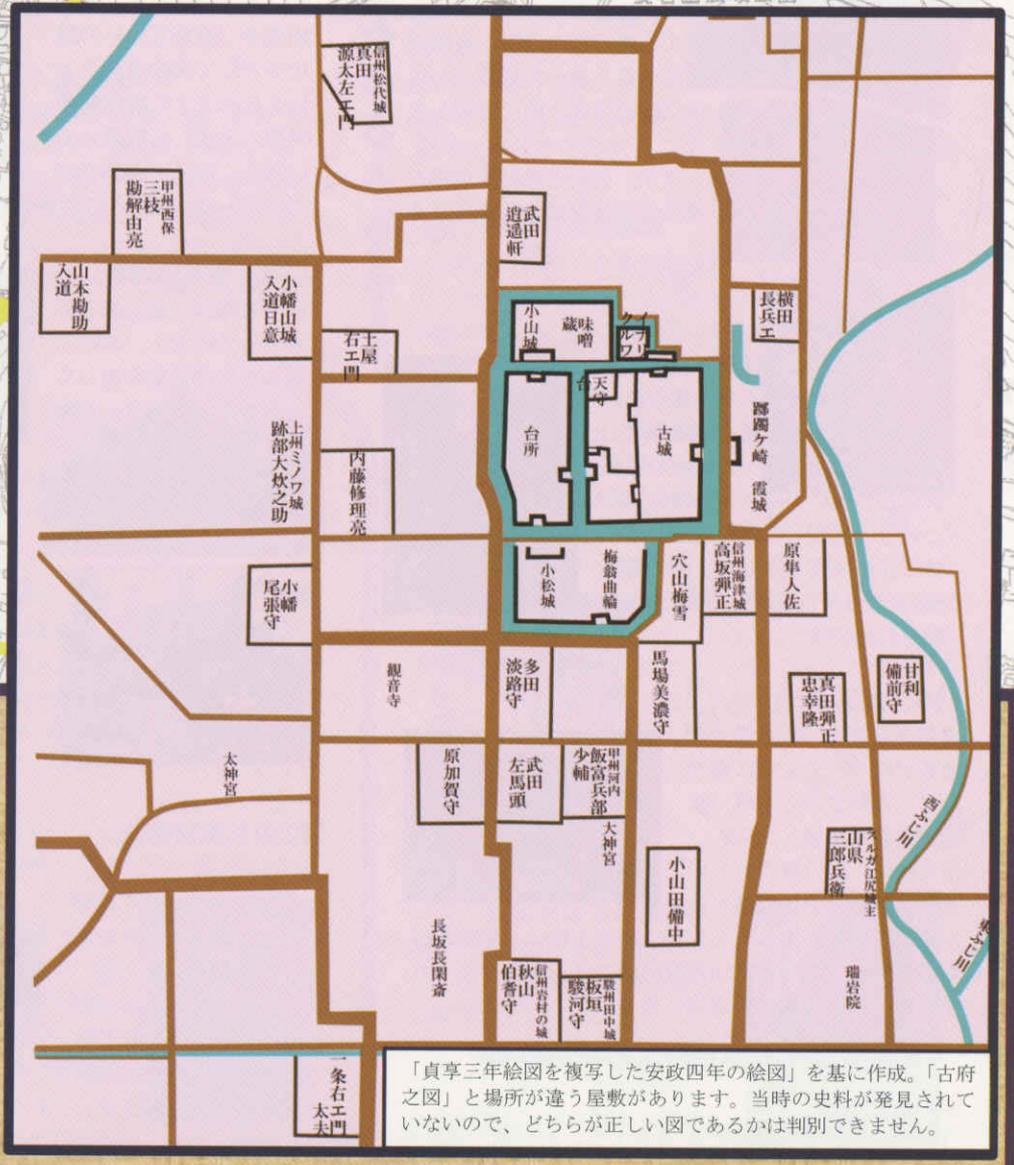


カエル石
甲斐惣社八幡の裏には古墳があったといわれる丘があり、西の入り口から見上げるとカエルに見えるというカエル石があります。

案内看板が設置されています。なお、家臣に近い「貞享三年絵図を複写した安政四年の絵

■ 武田関連寺社 □ その他寺社

- 9. 興国寺 10. 武田神社 11. 古八幡社
- 12. 八幡宮 19. 華光院 20. 八雲神社 21. 愛宕神社
- 22. 八雲神社 23. 八雲神社 24. 八雲神社
- 25. 八雲神社 26. 八雲神社 27. 八雲神社
- 28. 八雲神社 29. 八雲神社 30. 要法寺 31. 梅屋敷天満宮



「貞享三年絵図を複写した安政四年の絵図」を基に作成。「古府之図」と場所が違う屋敷があります。当時の史料が発見されていないので、どちらが正しい図であるかは判別できません。